

2009  
SUMMER

vol.

1

コリア国際学園 広報誌 <創刊号>

# 越境人

特集1 「越境人」を考える

特集2 対談 21世紀の教育と「生き抜く力」



# 建学の精神

境界をまたぐ「越境人」に。

## 教育理念

### 多文化共生

民族的アイデンティティと自尊感情を育むとともに、多文化共生社会の実現に向けた知識、技能、態度を身につけた人間を育成する。

### 人権と平和

人間の尊厳と民主主義を尊重し、世界平和を希求する普遍的価値を創造するとともに、地球的視野を持ち、持続可能な社会の構築に貢献できる人間を育成する。

### 自由と創造

真の自由を理解し、豊かな個性と多様性を基礎とした創造力を溢れる人間を育成する。

21世紀の国際社会は、グローバル化と情報化が加速する一方で、政治・経済・社会・文化のあらゆる面において、解決すべき人類共通の課題にも直面しています。とりわけ東アジアは、その集約的な地域のひとつとしてダイナミックな変化が予見される歴史的な転換期にあります。

こうした時代状況を未来に向けて切り拓いていくためには、なにより個性と多様性の尊重を基礎とした創造力の溢れる人間が求められています。言い換えれば、柔軟な発想と幅広いコミュニケーション能力を兼ね備え、問題解決能力に優れた人間の育成にほかなりません。

コリア国際学園（KIS）は、在日コリアンをはじめとする多様な文化的背景を持つ生徒たちが、自らのアイデンティティについて自由に考え学ぶことができ、かつ確かな学力と豊かな個性を持った創造的人間として複数の国家・境界をまたぎ活躍できる、いわば「越境人」の育成を目指します。

コリア国際学園（KIS）は、すべての教育活動を通じて相互の信頼と協同を深め、地域社会に根ざし、コリアにつながり、世界に開かれた国際学校として、世界と東アジアの持続可能な発展に貢献します。

#### ◆ 校章・シンボルマーク ◆

目であり  
宇宙であり  
太陽であり地球であり  
そして みつめていて、考えていて  
そして いつも ゆれている



#### ◆ デザイン・文 ◆

黒田 征太郎 Seitaro Kuroda  
(イラストレーター)

くろだ・せいたろう ● 1939年大阪府生まれ。  
'92年にNew Yorkへ移住。イラストレーターとしてポスター や挿し絵で数々の賞を受賞するとともに、壁画制作、ライブペインティングなど幅広いアーティスト活動を展開。  
コリア国際学園の発起人のひとり。

#### ◆ コメント ◆

色は 中心が 赤（火）（光）  
その外が 黄（アジア）  
その外が 草色（地）  
その外が 青（天であり水）

としました

2	理事長メッセージ	
3	学園長メッセージ	
<b>4</b>	<b>特集1『越境人』を考える</b>	
	梁 石日さん…在日コリアンの二重性	
	朴 一さん…Wカップ南北同時出場と3人の越境人	
	小林 恭二さん…詩の暗誦	
	榎井 紗さん…「負」「痛み」「弱み」への共有や 共感ができる力(繕う力)を	
<b>8</b>	<b>特集2 21世紀の教育と「生き抜く力」</b>	
	対談 : KIS理事 寺脇 研 × KIS校長 洪 孝子	
14	教員紹介	

16	教員スポット紹介
	数学・鍵本 聰 先生
	英語・ナージャ・マレー 先生
	コリア語・羅 卿化 先生
19	Special Interview
	生徒会長 今庄 貴博くんインタビュー 保護者からの声・地域住民の方からの声
21	NEWS REPORT
	ソウル大学・延世大学訪問 韓国・国科人中学校 姉妹校協定締結 教養・Liberal Arts科 授業訪問記 学校間交流活動 GTEC for STUDENTS試験結果 韓国語能力試験結果



越境人 2009年夏 創刊号  
 ・発行日 2009年8月1日  
 ・発行 コリア国際学園  
 〒567-0057  
 大阪府茨木市豊川2丁目13番35号  
 TEL:072-643-4200  
 FAX:072-643-4401  
 E-mail:contact-school@kis-korea.org  
 http://www.kis-korea.org/  
 ※越境人は年2回の発行です。  
 ※本誌記事を無断で転載等する事を禁じます。

# Special Amusement PLANNING

スタッフ募集・委細面談

在日韓国商工会議所 常任理事  
東京韓国商工会議所 副会長

民団中央本部	前副団長
東京王仁ライオンズクラブ	元 会長
東京慶尚南道道民会	理 事
在日コリア協議会	副 会 長
在日未来志向ネットワーク	副 会 長
東京ワンコリアフェスティバル	事務局長

株式会社 エスエープランニング

〒103-0027 東京都中央区日本橋3丁目5番12号 日本橋MMビル8階  
TEL 03(6214)1111 FAX 03(6214)1600

代表取締役社長 金 淳次



コリア国際学園 理事長  
文 弘宣

「境界をまたぐ越境人」の育成を建学の精神にかけ、昨年4月に開校したコリア国際学園（KIS）は、まさに「100年に1度」の時代の転換期の中で、産声をあげました。

グローバル化と成熟社会が加速する一方で、人間と社会や自然との関係性が急激に壊れつつあり、世界の持続可能性自体が危ぶまれる時代です。こうした中、時空や属性などの境界線を越え、さまざまな知・人・地域をつなぐ資質や能力をもった「越境人」を育成することで、世界と東アジアの持続可能な発展に貢献していくことが、KISの歴史的な使命です。

現在、政治、経済・社会、文化などあらゆる分野で、近代以降の既存の価値観や仕組みが、根本的な見直しを迫られています。決められた「正解」を追い求める「キャッチアップ」型から、道なき道を切り拓く「フロンティナー」型の人材が求められています。

特に、21世紀を生きる若い世代には、複雑でリアルな社会に向き合い考え抜く論理力や判断力、多様な価値観を持った人々と対話できるコミュニケーション力、問題解決に向けた表現力や行動力が、不可欠です。

今後、KISで学び巣立つ生徒たちは、コリア語、英語、日本語を駆使して、在日コリアン社会だけではなく、日本と朝鮮半島、東アジア、ひいては世界まで活躍の舞台を広げていくことになるでしょう。このことは時代の要請であるとともに、発展する企業の志向と要望にも沿うものであると確信しています。

KIS広報誌「越境人」の創刊が、KIS教育の方向性や問題意識、日々の生徒、教職員、保護者の熱心な教育活動の一端を伝える媒体になるとともに、会員の皆様の交流とネットワークの場になれば幸いです。会員の皆様のご支援、ご協力に心から感謝するとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。



さまざまな知・人・地域をつなぐ資質や  
能力をもった「越境人」を育成する。

# 越える

## 金時鐘

私は異邦人

今にして思うのだ

世紀を越えて暮らしていくても  
思いひとつ託せない

境界とは仕切りであり区切りであり  
そこで立ちはだかる壁であつたと

議会とは無縁の異邦人

境界のその入り組んだはざまで  
私たちはまさしく代を継いで生きてきたのだと

私は居ながらにして

余りにも長い月日が経ち

越境人だった

統一などとひと口でいうな

先々代の親たちが出稼ぎで徴用で  
やむなく越えた国だったからだ

あまたの壁が境界を成して連なつてゐる

おかげで私は

分断の痛みも角質と化した  
対立も不信も憎しみも

持つて生まれた国際人だ

そこで根付いた心の壁だ

さりとて気ままなボヘミアンではない  
在日を生きる朝鮮人だ

己が己を越えていかないかぎり  
通じる言葉は生まれてこない

苦労もひもじさも

越えるとは

学ぶための学校さえも

新しい視野が開けることだ

越えねばならない闇だった  
こらえて耐えた親たちの

知ることこそ力だと

今をつないだ日々だった

真に学ぶことに目覚めていくことだ



きむ・しじょん ● 1929年生。コリア国際学園学園長。詩人。評論集『在日』のはざまで毎日出版文化賞。詩集「新潟」「猪飼野詩集」「光州詩片」など。それらの集成詩集「原野の詩」は小熊秀雄賞特別賞を受賞。「在日」のはざまで01年、平凡社ライブラリーの一冊として再刊。金石範との対談集「なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか」。訳「尹東柱詩集」。講演・対談集「わが生と詩」。最新刊に再訳「朝鮮詩集」(岩波書店)。

「越境人」とは、何を意味するのでしょうか。KISにかかわる有識者が、自らの生い立ちや経験、エポックを画する出来事などの多様な切り口から、それぞれの「越境人」を切り取ってみました。

# 越境人を考える

私は大阪市東成区の朝鮮人長屋で生まれ育ちました。近所に暮らしている在日1世たちは、ほとんど朝鮮語をしゃべり、日本語をあまり使つていませんでした。地域に朝鮮人コミュニティができていたので、日常生活の中で日本語を使う必要性がなかったのです。母は私に朝鮮語（といつても済州島語ですが）で話し、私は母に対して日本語で受け应えしていました。近所の子供たちも、みな私と同じでした。したがって、朝鮮語を理解しているつもりでしたし、その気になれば、いつでも使えると思っていたのです。その思い込みが間違っていたのです。

その頃、大阪に「建国」という韓国学校がありました。現在もありますが、在日朝鮮人の間ではあまり重要視されていなかったのです。というのも、将来、日本の大学へ進学するためには日本の学校で学ばなければならぬと考へられていました。読み書きので

作家 梁 石臼

## 在日コリアンの二重性

### Profile



やん・そぎる ● 1936年大阪市生まれ。作家。29歳のときに事業に失敗し、大阪を出奔して各地放浪の末、東京でタクシー運転手を10年間勤める。著書に「タクシー狂騒曲」(映画「月はどっちに出てる」の原作)、「族譜の果て」、「夜を賭けて」(映画化)、「血と骨」(第11回山本周五郎賞/映画化)、「ニューヨーク地下共和国」、「闇の子供たち」(映画化)など多数。

きない在日1世が多かつた当時、せめて子供には手に職を持たせたいという思いが強くあり、技術者か医者になることを望んでいたのです。実際、在日コリアンには、技術者や医者が結構います。私も技術者になりたいと思っていたのですが、大阪の某有名工業高校の受験に失敗し、技術者になれませんでした。

問題は、それ以前に母国語を習得するという考え方がなかつたことです。これは在日コリアンのエアポケットだったといえるでしょう。在日1世は日常生活の中で日本語を使う必要性がなかつたわけです。それとは逆に在日2世の私は日常生活の中で朝鮮語を使う必要性がなかつたのです。それは現在も変わりありませんが、そのことが、私たちのナショナル・アイデンティティの二重性をもたらしているのです。自我形成のプロセスで、私たちはたえず自分は朝鮮・韓国人なのか日本人なのか、それ

ともなに人なのかを反問し、その二律背反に引き裂かれるのです。私は日本で生まれ、日本で育ち、母国語もろくに話せませんが、れつきとしたコリアンであると自負しています。しかし同時に、人ととの間を線引きしたことはありません。なぜなら人ととの間を線引きする根拠は何もないからです。人ととの間を線引きする俗された意識——それが20世紀において絶えずくり返されてきた植民地主義、民族紛争、そして戦争による人間性の破壊でした。それは21世紀においても続いているです。

「KIS」は、人ととの間を線引きしない人間性を形成する学び舎です。精神の自由と自立心と豊かな愛を育成していくことをめざしているのです。「KIS」を卒業した生徒たちは、将来、そのことを実証してくれるものと確信しています。

# Wカップ南北同時出場と 3人の越境人

大阪市立大学教授 朴一

## 北

朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）が、2010年に南アフリカで開催されるサッカーのWカップの本戦出場を決定した。

北朝鮮は1966年のイングランド大会でアジア勢で初めてベスト8という快挙を成し遂げ、世界にその実力を見せつけたが、それ以来40年以上もWカップに出場できなかつた。北朝鮮は特殊な国際政治環境におかれてきたことで、北朝鮮ナショナルチームは、他国と比べて国際試合が少なく、Wカップ予選のような独特的のムードで行われる試合に多くの選手が慣れていない。北朝鮮がWカップ予選をクリアできなかつたのは、選手の実力以上にそうした国の事情による部分も少なくなかつたようと思われる。

韓国とともにアジア最終予選に残つただけでも、私はすごいことだと思っていた。さらにアジア最終予選で北朝鮮が入ったB組は、韓国のか、サウジアラビア、イラン、UAE（アラブ首長国連邦）と中東の強豪国がひしめく、死のブロッケと言われ、抽選が決まつたとき、私は失礼ながら北朝鮮がこのブロッケを勝ち抜ける可能性は低いと思っていた。事実、多くのサッカー専門誌でも、B組から抜け出るのは韓国と伊朗、あるいはサウジアラビアと予想していた。

そして何よりも、鄭大世選手と安英学選手という北朝鮮ナショナルチームの攻守の要が在日コリアンの選手であったことは、在日社会に大きな感動と勇気を与えた。彼らの働きがなければ、北朝鮮は最終予選を突破できなかつたかもしれない。日本のJリーグ川崎フロンターレで活躍する在日3世の鄭大世選手は、韓国籍だが、小学校から大学まで朝鮮学校に通つた生い立ちを国際サッカー連盟に

で、サウジアラビアとUAEから勝ち点3をあげ、2位から4位が勝ち点1差でひしめくB組の混戦を制した。すでに本戦出場を決めた韓国と並んで北朝鮮がWカップに出場できるということは、まさに夢のような出来事で、これ以上に喜びはない。

そして今回のWカップの代表になれなかつたが、もう一人、在日コリアンの注目すべきサッカー選手がいる。柏レイソルの李忠成選手である。彼は国籍を韓国から日本に変え、北京五輪サッカーに日本代表として出場し、話題になつた。この3人のサッカー選手の生き様を見ていると、国籍や闘う舞台は違つても、サッカーと民族に対する思いは、一本の糸で結ばれているような気がする。いつの日か、KISから彼らのような越境人が育ち、さまざまな舞台で活躍してくれることを期待したい。

## Profile



ぱく・いる ● 1956年、兵庫県尼崎市に生まれる。コリア国際学園理事。大阪市立大学大学院経済学研究科教授。同志社大学大学院博士課程修了。商学博士。専攻は朝鮮半島の政治と経済、日韓、日朝関係論。TBS「サンデージャポン」他、数多くのテレビ、ラジオ番組でコメントーターを務める。著書に「(在日)という生き方」、「朝鮮半島を見る眼—「親日と反日」「親米と反米」の構図」など。

# 詩の暗誦

作家 小林 恭一

これまで二度、外国で学生に授業をしたことがある。

最初は「我が心の旅」というテレビ番組で、中国四川省の田舎のある小学校で授業をした。(ちなみにそこは先年の四川大地震で壊滅的被害を受けた地域で、それを使うと胸が痛む。)別に事前に決めていたことではない。たまたまロケで歩いていると、小学校があつたのだが、元気の良い子供たちの歓声を聞いているうちに、ディレクターが急遽授業風景を撮りたいといいはじめたのだ。

日本の小学校ではほぼ考えられないことだが、その小学校の先生は、ふたつ返事で飛び込み収録を承諾してくれた。

問題はここで何を授業するかといふことだ。その地は詩聖李白生誕の地だったので、とりあえず李白に関する授業をすることにした。

とにかく郷土の英雄とはいえ、この徹底した暗誦ぶりには羨望を覚ええた。作るにせよ鑑賞するにせよ、詩とのつきあいは暗誦に始まり暗誦に終わる。そのときはちんぶんを黒板に書けるかどうか聞いてみ

た。するとクラス中の生徒が元気良く手をあげた。そこでひとりの生徒を指名すると、すらすらと「静夜思」を書きあげた。さすが李白の里だと思い、他の詩を書ける生徒はいるかと訊ねてみた。再びクラス全員の手があがる。ひとりを指名すると、これまたすらすらと「白帝城」を書いた。ほうやはるなあ。それから次々と詩を書かせていった。六、七編目でようやく脱落する生徒が出始めた。それでも半分以上の生徒が手をあげている。八編目で学級委員長風の少女を指名したところ、なんと大作の「将進酒」を延々書き始めた。

現在はどうか知らないが、わたしの子供の頃の日本の国語教育では、暗誦よりも鑑賞に重きが置かれていた。

かんぶんであっても、覚えていればいつの日かその意味を理解できる日がくる。逆にどんなに懇切丁寧に解説されても、暗誦していく詩は何の意味もない。それはこれから的人生に何ももたらしてくれないからだ。

もう一度の授業体験も、テレビからみだった。パリの女子高生に俳句を教えたのである。相当な名門校だったが、さりとて生徒たちが文学に特別な感心を抱いていることもなく、事前アンケートの「将来の夢」欄には「公務員」「不動産業者」「教員」といった手堅い職業がならんでいた。

私は授業をする前に生徒たちに好きな詩人はいるかと訊ねた。すると、アボリネールとかランボーとかいう一丁前の名前が返ってくる。わたしは意地悪い笑いを浮かべて、だつたら暗誦できるかと訊ねた。すると彼女たちは「あま

り詩には興味はないんですけど、り詩には興味はないんですけど、

一、二編なら」と答えた。そして事実すらすらと暗誦してみせた。こちらも見事に暗誦教育がなされている。

現在はどうか知らないが、わたしが一度の授業体験も、テレビからみだった。パリの女子高生に俳句を教えたのである。相当な名門校だったが、さりとて生徒たちが文学に特別な感心を抱いていることもなく、事前アンケートの「将来の夢」欄には「公務員」「不動産業者」「教員」といった手堅い職業がならんでいた。

私は授業をする前に生徒たちに覚えるべきである。それが将来文學に対するとき、何よりの財産になる。いや、文學に無縁の人生を送つても同じだ。それはあなたの人生を確実に豊かにしてくれるはずなのだ。

## Profile



こばやし・きょうじ ●1957年、兵庫県西宮市生まれ。作家。東京大学文学部美学芸術学科卒。1984年「電話男」で第3回海燕新人文学賞を受賞。1998年「力ブキの日」で第11回三島由紀夫賞受賞。2004年から専修大学文学部教授。俳句、短歌、歌舞伎にも造詣が深い。著書は50冊以上、小説作品は英語、ドイツ語、ロシア語、中国語、韓国語にそれぞれ翻訳出版されている。

# 「負」「痛み」「弱み」への共有や 共感ができる力（繕う力）を

財団法人とよなか国際交流協会事業課長 榎井 縁

5

月末のインフルエンザパンニックで、自宅待機を強制させられた子どもたちが、補導員に追われ、公園、コンビニの前、空き地と次々に移動していくいたちごっこを眺めながら、地域の学校という日常が、日本社会で果たす役割の大きさについて再認識させられた。子どもにとっての学校は、とりもなおさず、仲間と戯れることのできる社会的正當性を持った居場所なのだろう。

残念ながらわたしにとつての学校の記憶は居心地の悪さから始まっている。周囲とちがうと排除される場所、息を潜めて生き延びる場所、自尊感情や自己評価を夥しく低くした不幸な場所だった。「いじめられるあなたがだめ」新任教員がつけた赤いサインペンの大さな×が傷から滲む血のように見えた。自己責任という闇から抜けだすのは10数年後のことである。時を経ても学校は、子どもにとって、安心できる集団をつくる。

場所であることが基本だろう。そこにどのような大人（教員・保護者）の眼差しが注がれるかによって、子どもの獲得するもの（学び）は違っていく。学校が社会に必要な人間を選別する装置として機能する側面から見れば、昨今騒がれているのは、技術的・機能的に獲得するべき基礎知識としての学力である。厳しい時代に負けない「生き抜く力」は何のためにつけるのだろうか。

わたしの話に戻ろう。暗い闇から解き離れたときつかけは、ナボタスというフィリピンの漁村の、同じ19歳の青年のことばだった。「日本人のおまえはどう考えるのか」。—義務教育も十分に受けられなかつたかれが、経済格差を生み続ける社会構造—世界構造の矛盾に対する説明をわたしに求めた。当時は自分と社会・世界が繋がつていなかつた東京の大学生だからいま、K I Sの謳う「越境人」に、二つの期待をしたい。

一つは、様々な境を越えていくところとからだをK I Sでは是非培つていただきたい。

わたくしの話に戻ろう。暗い闇から解き離れたときつかけは、ナボタスというフィリピンの漁村の、同じ19歳の青年のことばだった。「日本人のおまえはどう考えるのか」。—義務教育も十分に受けられなかつたかれが、経済格差を生み続ける社会構造—世界構造の矛盾に対する説明をわたしに求めた。当時は自分と社会・世界が繋がつていなかつた東京の大学生だからいま、K I Sの謳う「越境人」に、二つの期待をしたい。

一つは、様々な境を越えていくところとからだをK I Sでは是非培つていただきたい。

## Profile



**YUKO**

えのい・ゆかり ● 財団法人とよなか国際交流協会事業課長。自治体国際協力アドバイザー。ネパールで活動しチベット難民児童の教育支援団体を設立。中学校教員として開発教育に取り組んだ後、神奈川や大阪で在日外国人教育の調査や相談に携わる。現職では、地域や学校とつながりながら、周縁化される外国人を主眼に据え、社会の再構築を試みると共に、人権教育や国際教育の研究を行っている。

そして二つ目は、越境することにより誰にも負けない（裏返すと自分だけ勝つ）子になるのではなく、「負」「痛み」「弱み」への共有や共感ができる力（繕う力）も持てるような子どもを育てて欲しいということである。なぜなら、そのことが、社会に蔓延する不安を緩し、暴力を減らす最大のマンパワーになるからである。

いま、国連が提唱している「持続可能な開発のための教育（E S D）」は、自然環境に留まらず、経済や人間関係も含め、進歩といわれるものの犠牲になつたあらゆる「小さな叫び」や「声なき声」に耳を傾けることから、社会の価値観を反転させることを目指している。子どもたちに、このことができるようしなやかなことをからだをK I Sでは是非培つていただきたい。